

## 国際連盟脱退と齋藤實内閣

平成16年4月22日・鎌ヶ谷中央公民館

昭和六年九月十八日の夜、奉天郊外柳条湖の満鉄爆破で始まった満州事変が、支那事変、太平洋戦争と、日本の「十五年戦争」の扉を開いたとするなら、その日本の運命を「戦争の方向へ」と決定づけることになったのが、これからお話しする国際連盟からの脱退です。昭和八年三月、退役海軍大将齋藤實内閣の時でした。

五・一五事件で暗殺された犬養毅首相は、陸軍や関東軍が進めてきた傀儡国家満州国の建国には反対でした。そんなことをすれば、日本は国際条約違反で国際世論の袋叩きになる。国際社会から孤立してしまふ。そう思った犬養は、満州国が建国宣言をしても、その承認には首を振りませんでした。承認を延ばしている間に、何とか打開策を見付けようとしたのですが、後を継いだ齋藤内閣は四か月後にはあっさり満州国を承認してしまつたのです。軍人出身とはいえ、リベラルな考え方で知られ、欧米の政治家にも信頼されていた齋藤です。齋藤はジュネーブ軍縮会議の全権も務め、国際協調、国際連盟の大切さを人一倍よく知っている人でした。その齋藤が、なぜ連盟脱退につながる恐れのある「満州国承認」の道を選んだのでしょうか。

五年ほど前でしたか、NHKで放送した「マッカーサーへの手紙」という番組をご記憶の方もいらっしゃると思います。終戦直後、占領軍最高司令官のマッカーサー元帥に、日本人が五十万通もの手紙を出していたと云うのです。敗戦のショックの中、突然降ってきた民主主義と天皇制との間で揺れた、当時の日本がよく出ている番組でしたが、「天皇を裁判にかけないで下さい」とか、「天皇なしの日本は考えられない」。多くの国民が、こう云つた嘆願を必死の思いでマッカーサーにしたのです。アメリカをはじめ戦勝国の間では、昭和天皇をヒットラーやムッソリーニ同様のファシスト、危険人物と見做して、厳罰にしろと云つた声が支配的な時でした。マッカーサーがまず天皇の人柄を認めたこともありましたが、アメリカ国内の空気を次第に天皇制存続へと変えていったのは、國務次官をしていたジョセフ・グルーの力が大きかつたと云われます。

グルーはこの齋藤内閣の時に駐日大使として来日し、戦争が始まつて日米交換船で帰国するまでの十年間、日米関係の改善に努力した人です。帰国したグルーは、こんな講演をしているのです。「天皇制や神道は、軍国主義を助長しているから抹殺すべきだ。こう説く人たちがアメリカにはいるが、軍国主義さえ排除するなら、天皇制も神道も平和日本にとって邪魔者どころか、かえって安寧を助け

るものとなろう」。昭和十八年の暮れ、太平洋では日米海軍が死闘を繰り広げている時でした。ニューヨーク・タイムズは社説で、「アメリカ兵がガダルカナルで死に、タラワで傷ついたのは、天皇の国日本、神道の国日本を打ち破るためではなかったのか」。こう書いてグルーを名指しで非難しましたが、グルーは持論を変えようとはしませんでした。

実はグルーのこうした日本理解は、斎藤實とその夫人春子から受けた深い感銘が土台になつていたのです。グルーは「滞日十年」という本を書いています。その中で内大臣在任中の昭和十一年、二・二六事件で陸軍皇道派の青年将校に暗殺された斎藤について、「愛すべき、穏やかな、魅力的な、礼儀正しい人だが、この国粹主義の荒れ狂う時代でも、幅の広いベラルな見解を持ち続け、深い知恵を持った人だった」と、人物、見識に最大級の賛辞を贈っています。グルーは二・二六事件の前夜、斎藤夫妻を大使公邸のアメリカ映画観賞会に招待していました。斎藤は大雪の中を帰宅し、数時間後に暗殺されたわけですが、グルーは春子夫人から聞いた事件の模様を詳細に書き残しています。

ただならぬ物音に、夫人が二階の板戸を開けると、抜き身のサーベルを構えた将校と、機関銃、ピストルを持った兵隊たちが立っていました。慌てて板戸を閉めようとしたが間に合わず、斎藤は乱入してきた兵隊に撃たれ、夫人が駆け寄りた時はすでに絶命していました。夫人も背中を撃たれましたが、兵隊が斎藤の遺体に向けて機関銃を撃ち出したので、気丈にもその銃身を掴んで、「撃つなら、この私を撃つて下さい」と、両手を大きく広げたと云うのです。夫人はさらに左手と右肘を撃たれましたが、翌日弔問に訪れたグルー大使に、こう挨拶したそうです。「夫は今までトーキー映画を見たことがございませんでした。大変楽しかったです。夫は今までトーキー映画を見たことがございませんでした。大変楽しかったです。主人は必ずや主人に代わって、私に礼を云うように望んでいます」と存じます。グルーは「武士の妻」という言葉を使って、健気な夫人のことを感動を込めて書いています。そして戦争中だからこそ、「日本にもこのような人がいるのだ」と、アメリカ人の偏見の壁を破るため、敢えて筆をとつたと云うのです。戦争中に敵国の人間を誉め、こんな本が出せる。アメリカという国の底の深さといったものに、改めて驚きを感じます。

春子夫人は昭和四十六年、斎藤の故郷・岩手県の水沢で九十八歳の高齢で亡くなりました。雪が降ると、あの忌まわしい夜を思い出すのか、「雪はいやです」が口癖だったそうです。「お世話になりました」と、周りの人へのお礼が最後の言葉だったと云いますが、角膜は夫人の遺言で、岩手県内の十六歳の少年に移植されました。まさに見事な生涯でした。それにしても、グルーから「深い知恵を持っていた」と信頼され、敬愛されていた斎藤が、どうして国際連盟脱退という最悪の道を防ぐことが出来なかったのか。その思いが強く残ります。

昭和七年の五・一五事件で犬養首相が暗殺された後、どんな内閣を作るかは、昭和天皇にとつても、後継首相を推薦する元老の西園寺公望にとつても大問題でした。日本国内はここの二年、国内問題、国外問題で騒然としています。東京駅での浜口雄幸首相狙撃事件に始まり、三月事件、十月事件といった陸軍のクーデター計画。血盟団のテロに続いて、今度は現職の総理大臣が首相官邸で海軍青年将校たちに射殺されたのです。国外では満州事変、上海事変が起こり、国際連盟調査団の現地調査も始まっています。しかも昭和の大恐慌で都会には失業者が溢れ、農村は貧困に喘いでいます。斎藤自身、最初の施政方針演説で「非常時」という言葉を使ったように、新聞も非常時ムードを書き立てました。「いま何時？」と聞かれて、「非常時よ」と答えるのが流行ったそうですが、内憂外患、まさに危機感が充満している時でした。

明治憲法は「大臣輔弼の憲法」といつて、天皇の統治権は國務大臣の助言、補佐によつて行なわれます。昭和天皇には昭和三年の張作霖爆殺事件で、苦い思いがありました。当時の田中義一首相は、天皇に事件を起こした関東軍高級参謀河本大作大佐らの嚴罰を約束したのですが、陸軍の反対で出来ませんでした。天皇から「前と話が違ふ。辞表を出してはどうか」と咎められ、内閣総辞職をしたことです。イギリス式の立憲君主制、「君臨すれど統治せず」を理想とする西園寺から、「天皇は自分の意見を直接表明すべきではない」。こう諫められた天皇は、この時以来内閣の上奏に対しては、たとえ自分が反対の考えを持っていても、許可することに決心されたと云います。ですからその天皇にとつて、自分の考えとはそう違わないよう、間違いなく補佐してくれる内閣を選ぶことが、まず大切だったのです。

昭和天皇は後継首相について、必ず西園寺に注文をつけられています。ファツシヨのような者は絶対にいけない。外交は国際平和を基礎とし、国際関係の円滑に努めること。この二点ですが、今回はさらに、首相には人格の立派な者であることが強調され、憲法を尊重すること。「そうでなければ、明治天皇に相すまぬ」と云つておられます。いずれも西園寺が「ごもつとも」とうなづくことばかりでしたが、五月二十六日に斎藤内閣が成立するまで、十日間もかかっています。こんな異例とも云える政治空白があつたことは、そのまま西園寺の苦悩がいかに深かつたかを物語っています。

後継内閣に向けて、素早く動いたのが陸軍と政友会です。五・一五事件から二日後の十七日の新聞は、「政党内閣絶対反対」の大見出しで、参謀次長や陸軍次官といった幹部が、陸軍大臣の荒木貞夫に「政党内閣では国家の急は救えない。軍部の反対を西園寺に進言せよ」と、申し入れたことを報道しています。この軍の意向を受けたのでしよう。憲兵司令官の秦真次は、静岡県興津の別荘から上京してきた西園寺に列車内で面会を求めたのですが、秘書役の原田熊雄から「疲れて

いるから上京後にしてくれ」と断られると、サーベルを床にガチャリと叩きつけ「今は国家の非常時ですぞ」と怒鳴ったそうです。参謀本部第二部長の永田鉄山少将も内大臣秘書官長の木戸幸一に、「もし政党単独内閣の場合には、陸軍大臣に就任する者は恐らくいない。結局、組閣難に陥るだろう」と警告しています。

十八日には陸軍が、陸軍大臣を入閣させる条件を公表しました。「軍の統帥権を尊重し、軍の主張する政策に協力すべきだ」というもので、陸軍の気に入らない者が入閣すれば、陸軍大臣は送らないぞといった拒否権もちらつかせていました。国民は、満州事変や上海事変が関東軍の謀略だったことを知りません。陸軍の宣伝のままに、「横暴な中国軍の仕業だ」と信じ込んでいましたから、圧倒的に軍部を支持していました。ただ強いことさえ云っていれば、全てが正義の論であり、国内の人気を博す時代になっていました。陸軍はこの国民世論をバックにして、「政党内閣制排撃」の意思を初めて公然と明らかにし、その政治介入は露骨なものになっていったのです。

これまで、政友会の原敬首相が暗殺された後は高橋是清、民政党の浜口雄幸首相が狙撃された後は若槻礼次郎といったように、暗殺などによる政変の後は、同じ政党の内閣が続いていました。「反対党に政権を渡せば、暗殺を奨励することになる」。これが西園寺の考えでしたが、議会の絶対多数を誇る政友会は、今度も当然、犬養の後の首相は政友会からと思っていました。ですから後継総裁に選ばれた鈴木喜三郎は、荒木に面会して陸軍の条件受け入れを申し入れると、これで陸軍の了解は取り付けたとばかりに、早々と「政友会単独政権構想」を発表したのです。ところが陸軍が首相にと考えていたのは、枢密院副議長で右翼「国本社」の総帥、対中国強硬論者である平沼騏一郎でしたから、態度を硬化させ、かえって政党排撃ムードを高める結果になってしまいました。政友会の実力者森恪ももともと一党主義の考えですから、表向きは総裁の鈴木を担ぎながら、その一方で秘かに平沼政権を画策をしていました。後に首相となり「若きプリンス」と云われた近衛文麿も、平沼や陸軍大臣の荒木の名前を持ち出したことがあり、西園寺は近衛を自分の後継者と考えて教育していただけに、ひどくがっかりしたようです。「ファッショは絶対にいけない」という天皇の意思が、平沼にも荒木にもないことは明らかです。

最初は政友会内閣の継続を考えていた西園寺も、鈴木が総裁に選ばれた時、その考えを捨てたようです。鈴木は平沼と同じ司法畑の出身で、平沼とは格別密接な間柄でしたから、鈴木内閣にすれば実質「平沼内閣」になると思っていたのです。しかも陸軍は、「政党内閣絶対反対」を叫んでいます。残る道は、政党を基礎とはするが、政党の党首でない人。立場の公平な人で、各界から協力を得られる「中間内閣」しかありません。こうして、五・一五事件後の政局を安定させるのにふさわしい人として、二度の西園寺内閣で海軍大臣を務め、西園寺も人柄をよく知っ

ている齋藤の名前が上がってきたのです。

齋藤は岩手県の水沢藩出身ですが、県庁の給仕をしながら苦学して海軍に入つたと云う、立志伝中の人物です。しかも薩摩全盛の海軍にあつて、海軍次官を七年、大臣に至つては五代の内閣で八年も務めています。薩摩海軍の長老、仁礼景範中將の令嬢春子と結婚して、薩摩閥に組み入れられたこともありましたが、齋藤の生涯を通じて常に高く評価されたのが、その人柄でした。明治、大正の日本の海軍を動かしてきたのは、「海軍育ての親」と云われた山本権兵衛、この齋藤實、そしてワシントン会議で海軍軍縮条約をまとめた加藤友三郎の三人です。三人に身近に仕えた山梨勝之進海軍大将、戦争中学習院長として今の天皇の教育に当たつた人ですが、こう云つています。「山本大将の前に立つと、燦々と輝く灼熱の太陽の前にある思いがする。加藤大将の前に立つと、何物をも一点の狂いもなく映し出す、鏡の前に立つた思いがする。齋藤大将と共にある時は、香り高いウイスキーを杯に汲み、静かに語る思いがする」。実に見事な人物評で、私は酒飲みのせいか、齋藤のゆつたりした雰囲気が出ていて好きな言葉です。ただ山本の実行力、加藤の決断力、判断力といったものに対して、齋藤だけは大らかな人柄の暖かさです。

山本権兵衛は明治三十一年、四十五歳の若さで海軍大臣になると、次官に大佐になつたばかりの齋藤を抜擢しています。階級を重視する陸海軍で大佐の次官と云うのは、この前にもこの後にもありません。齋藤の下の局長に、位でいえば上官にあたる少将が何人もいたと云います。山本という人は、海軍近代化の先頭に立ち、力はあつたが、この人が座つただけで座敷が敵味方に分かれたと云われたくらい、敵の多い人でした。山本は、次官に包容力のある齋藤を据えることで、自分に対する反感を和らげ、海軍を一つに纏めると云う点で、絶妙なコンビを組んだのです。齋藤は朝鮮総督も二回にわたり十年もやっていますが、「独立万歳事件」と云われた朝鮮の動乱に、やはり人柄を買われたものでした。大正八年三月一日、ソウルで学生たちが独立宣言をしたのをきっかけに、長年憲兵に押さえ付けられてきた不満が一気に爆発し、「独立万歳」を叫ぶ声が朝鮮全道に広がつていったのです。軍隊を動員してどうにか鎮圧しましたが、政府は陸軍の総督に代えて海軍の齋藤を起用することで、それまでの武断統治から文化的統治へと大きく方針転換させました。齋藤もまた日鮮融和を図る政策を着実に実行し、朝鮮がある程度安定したのは、齋藤の徳望によるところが大きかつたと云われます。西園寺にはこの時の齋藤も印象に残つていたようですが、果たしてこの難局に人柄だけで良かったのかどうか、疑問が残ります。

西園寺は後継首相に齋藤を決断した時、近衛にこう云つたそうです。「私には時勢を憤つて、それを切り開こうとか、狂乱を回そうとか、そう云つた勇氣はない。時勢に逆らひもしなければ、流されもしない」。西園寺は現在の政局の混乱

は、青年将校らの一時的な熱狂が引き起こしたもので、しばらく事態を鎮静させることが出来れば、安定は回復するだろうと信じていました。そして「軍人が政治を左右する弊害を防ぐのが今日の急務だ」として、「結局は軍に引つ張られるだろうが、極力ブレーキをかけ、それでも止むを得ない場合は譲歩する。譲歩しても、その結果が実際に現われるのは、出来るだけ先に延ばすようにする。譲歩することで生ずる危険も、最小限度に止める。これが中間内閣最大の使命だ」と云っています。要するに「何もしないでもいいから、余計な刺激を与えず、事態を鎮静させる」。これが、この内閣の使命だと云うのです。

「無為にして化す」という、老子の言葉があります。聖人の偉大な徳は、何をしなくても自然に人民を教え導き、良い方向へ向かわせるといふ意味ですが、首相の齋藤に期待されたのが、まさにこれだったのです。そこには、過熱した事態を冷まることが出来たら、政党内閣を復活させたいという、西園寺の期待もあったでしょう。しかし同時に、そう云わざるを得ない時流に、西園寺の深い失望と疲労感を感じます。西園寺はこの時、八十二歳の高齢でした。体調を崩すことも多く、再三元老を辞退したいと云っています。私は西園寺という人は、元老としての見識といい、政治判断といい、抜群の政治家だったと思います。しかし、どんなに国内の秩序回復が大事だったとはいえ、「引つ張られつつ、ブレーキをかけるだけ」というのは、余りにも無策だったのではないでしょうか。

なぜ首相に、積極的に事態を切り開いていく、犬養毅や浜口雄幸のような、リーダーシップのある人を選ばなかったのか。もともと、それは今になって云えることであって、陸軍が「政党内閣絶対反対」を叫び、国民も熱狂的に軍部を支持していたあの時では、そんな内閣を作っても一日も保たなかったかも知れません。西園寺とすれば、止むを得ない選択だったにしても、やはり気力が衰えていたのではないのでしょうか。私は日本の進路にとつて、この西園寺の気力の衰え、あきらめにも似た境地が大きかったように思います。

近衛は、西園寺から齋藤の名前を聞いた時、「何もしない人として至極有名だから、適任だと思った」と、日記に書いています。この近衛の「何もしない人」という辛辣な批評には、長い間要職に座りながら、自らは動かず、敵を作らずに無難にまとめる。まさに「無為にして化す」人、齋藤に対する皮肉が込められています。大正三年のシーメンス事件の時、山本権兵衛内閣が総辞職に追い込まれ、齋藤自身も海軍から身を引く原因になった、軍艦建造をめぐる贈収賄事件ですが、海軍大臣の齋藤はある程度事件を知っていたしながら、議会で問題になるまで、司法当局に捜査させるなど、積極的な手を打ちませんでした。齋藤という人は、出来れば穏便にすませたいと、慎重ではあるが、こちらから先手を打つことのない、「受け身の政治家」だったように思います。

こうして誕生した齋藤内閣は、日本の政治史上、大きな転換点となるものでし

た。大正十三年以来、八年間続いた政党内閣が終止符を打ち、政党の党首が首相になることは、これ以後敗戦まで十三年間、二度となかったからです。齋藤内閣のスローガンは「挙国一致」、いわば政界各勢力の結集を図ろうと云うものです。

大蔵大臣には政友会の長老高橋是清を留任させ、民政党にも重要ポストである内務大臣を割り振って、一応両党の協力は取り付けました。しかし衆議院に議席を持つ政党人は、犬養内閣の十人から一挙に三人に減りましたし、代わって官僚出身者が五人も入閣しています。「挙国一致内閣」と云うと、言葉だけは一枚岩のようですが、裏を返せば「寄り合い所帯」。あつちの顔を立て、こつちの顔も立てる。喧嘩をしないで、妥協が前提の内閣ですが、陸軍大臣の荒木留任こそ、妥協の典型だったと云っていいでしょう。五・一五事件は海軍の青年将校が中心とはいえ、陸軍の士官候補生が十一人も参加しているのです。引責辞任して当然でしたが、皇道派は自分たちの勢力後退につながるのを恐れ、いち早く陸軍の三長官会議で荒木留任を決め、齋藤首相に申し入れたのです。齋藤はこの時七十三歳でしたし、しかも陸軍との摩擦を避けることが課題になっている内閣です。政治も外交も、軍部の意のままに動く必然性を持つていたのです。

齋藤内閣が成立した時、「満州国を承認すべきだ」という国内世論は、すでに盛り上がっていました。満州国の建国宣言は犬養内閣時代の昭和七年三月一日、国際連盟のリットン調査団が来日した翌日で、関東軍は国際連盟がどんな調査をしようとして、犬養首相がどんなに反対しようとして、その前に満州独立の既成事実を作ってしまったおとしたのです。満州国が日本をはじめ十八か国に對外承認を求めると、陸軍大臣の荒木は閣議で即座承認を主張し、「連盟に入っているから全ての面で拘束される。この際思い切って連盟を出てこそ、むしろ自由の天地を開拓出来る」と、連盟脱退まで公言する有様です。しかし、アメリカは「正式な外交文書とは見做さない」と完全無視でしたし、他の国も「通告を受け取った」という回答を寄越しただけでした。首相の犬養は、「日本が満州国を承認すれば、九か国条約違反で非難される。それが国際連盟脱退につながる」との明確な認識を持っていました。九か国条約というのは、大正十一年のワシントン会議で、日本やアメリカなど会議に参加した九か国が「中国の主権尊重と領土保全」、つまり侵略しないと約束した国際条約です。ですから犬養は、承認を出来るだけ引き延ばし、その間に何とか日中和解の道を探ろうとしたのです。

大体がこのリットン調査団というのは、日本の要請によって派遣されたものなのです。蒋介石の国民政府は共産軍との内戦で手いっぱいでしたから、満州事変が始まってからも一貫して、国際連盟で紛争を処理する態度をとってきました。国際連盟はご承知のように、第一次世界大戦後の世界秩序、国際平和を守るために、スイスのジュネーブに設置された国際機関です。一番熱心に呼び掛けたのはアメリカだったのですが、上院でベルサイユ講和条約の批准が否決されたため、

肝心のアメリカ抜きということになっていました。連盟理事会は、日本をはじめイギリス、フランス、ドイツ、イタリアの常任理事国五か国と、任期三年の非常任理事国九か国、計十四か国で構成されています。理事会は日本に対する期限付き撤兵勧告案を十三対一、つまり日本の反対だけで採決しましたが、理事会決議は「全会一致」が原則ですから、一応は不成立になっていました。そして「連盟は満州の実情をよく知っていない。公正な立場で現地調査してほしい」。こう云う日本の要請で、イギリスのリットン伯爵を団長に、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアをメンバーとする調査団の派遣が決まったのです。

外務省も、国際協調第一主義の幣原喜重郎が外相の座を去つてからは「陸軍省外務局」と云われるくらい、陸軍の代弁者に様変わりしてしまいました。関東軍が次々と事変を拡大して行く中で、ただそれを追認し、処理するだけの立場に追い込まれていた外務省です。そんな中で「自主外交だ」と云って、外交の主体性を回復しようとするほどの、どうしても陸軍との協調路線をとり、対外強硬論を唱える者が幅をきかしていくことになります。アジア局長の谷正之、情報部長の白鳥敏夫といった人たちは連盟脱退論者で、外務省では連日のように昼食会が開かれ、陸軍の幹部を招いて、満州国承認に向けて情報交換をしていたのです。

ですから齋藤は首相になった時、陸軍が強硬に主張する満州国承認は、もはや避けられないと思つていたようです。首相就任直後の議会で、政友会代議士の松岡洋右、やがて連盟脱退の立役者となる松岡が「満州国の即時承認」を迫ると、齋藤も「出来得る限り速やかに承認したい」と、承認に積極的な態度を表明していません。政友の方も、国民世論の熱気に押されたように、軍部に負けず劣らず熱心でした。六月十四日の衆議院本会議は、政友会、民政党両党提案の「承認決議案」を満場一致で可決したのです。問題は承認の時期でした。いくら口で「承認する」と云つていても、承認さえしなければ、いくらでも外交交渉の余地はあります。まして日本側の要請で派遣された調査団です。国際常識、外交儀礼から云つても承認するかどうかは、調査団の報告を待つて決定すべきだったでしょう。

齋藤首相最大のミスは、満鉄総裁から外務大臣に起用した内田康哉でした。明治憲法では今の憲法のように、首相に大臣に対する指揮監督権もなければ、云うことをきかない大臣をクビにすることも出来ません。外交問題は、外務大臣が直接天皇に責任を負っていますから、天皇がどんな内閣を選ぶかが問題だったように、首相もまた自分と同じ考えの外務大臣を選ぶことが大切だったのです。国際協調を重視する齋藤も、勿論その積もりで内田を起用したのです。内田は四代の内閣で外相を務め、アメリカ大使やソ連大使も歴任したベテラン外交官です。国際連盟の規約にも自ら調印していますし、齋藤も閣僚として一緒に仕事をして、気心のよく知れた仲でした。それに満州事変が始まる直前、内田を満鉄総裁にしたのは、当時外相だった国際協調第一主義の幣原なのです。幣原は満州の不穏な



動きに、内田の豊富な国際経験、見識を買って、関東軍を抑えるために総裁として送り込んだのです。ところが内田は、満州事変が勃発すると心境一変、関東軍にすっかり共鳴するようになってしまいました。「日本の立場から見ると、もはや満州問題なし。残るは、満州国承認問題あるのみ」。こんな講演をして回るほど、ミイラとりがミイラになっていたのです。

外相になった内田は、満州国承認に向けて着々と準備を進めました。満州には関東庁、領事館、関東軍に満鉄と四つの機関があつて、「四頭政治」と陰口されるほど、その縄張り争いはひどいものでした。ところが内田は、「これをすつきりさせる」という名目で、満州問題を外務省の所管から外し、関東軍に渡してしまつたのです。陸軍大臣を総裁とする対満事務局が設置され、関東軍司令官が満州駐在特命全権大使と関東庁長官を兼任しました。いわばこの「三位一体」体制で、関東軍は満州の軍事だけではなく、行政から外交まで握ってしまったのです。軍部のお先棒を担いだにしても、これほど軍部に無批判、無抵抗の外務大臣もいなかったのではないでしょうか。

日本は八月二十五日、「満州国承認」を世界に発表しました。内田外相はこれに先立って、リットンにこう説明しています。「満州国は満州人によつて自発的に作られた国家だ。だから九か国条約には違反しない。満州国承認は日本の自衛権に基づくもので、関係国と協議する必要もない」。これが内田の論理でしたが、二十五日の議会では有名な「焦土外交」演説をして、一步も引かない構えを内外に示したのです。政友会の森恪が「承認の執行は、自主外交への大転換を宣言するものだから、列国との摩擦が生じた場合、政府はどうするのか」。こう質問したのに対して、「満州問題のためには、いわゆる挙国一致、国を焦土としても一步も譲らない決心を持っている」と答弁したのですが、対中国強硬論者の森恪でさえあわてて、「どう云うことにならないよう、努力してもらわなければ困る」とたしなめる始末です。「国を焦土とする、国を滅ぼしても」といったことは、外務大臣自ら外交を否定するものでした。西園寺は「田舎へ行つてくると、どうしてあバカになるのか」と云つたそうです。田舎というのは満州のことですが、日本は十三年後にまさに「焦土」となる運命を迎えまることになります。

こうして齋藤内閣は九月十五日、「日満議定書」に調印して満州国を正式に承認し、外交関係を樹立したのです。議定書は「日本の権益を確認し、尊重し、日満両国の共同防衛と日本軍の無条件駐屯を認める」と云う、たつた二か条の条約です。日本の植民地的支配を示すもの、例えば満州国の国防は日本に委託し、その費用は満州国が負担する。日本軍の必要とする輸送機関や施設を、日本指定の機関に委託する。こう云つた軍事協定とか、満州政府を実質的に動かす日本人参議や役人の任命権は、関東軍司令官が握っているといったことは、秘密にされたのです。齋藤内閣は「これで日満両国は国防上、国民的生存上、不可分の関係にな

つた」という政府声明を発表し、併せて「満州での門戸開放、機会均等の原則は順守する」と、対外的には国際協調を図る建前も示しました。日本国内は「日滿新時代来る」と熱狂的な拍手で歓迎しましたし、朝日新聞も社説で「世界史に一新紀元を画す」と、画期的な意義を強調しています。そして「国際連盟何するものぞ」と、民族主義、ナシヨナリズムがますます高揚していったのです。

しかし世界各国は、当然「国際連盟に対する挑戦だ」と反発しましたし、中国では反日抗日ゲリラの活動が活発になっていきました。これは戦後まで全く秘密にされていたことですが、この時「平頂山事件」と云われる事件が起きています。日本が満州国を承認した九月十五日の夜、満鉄が経営する撫順炭坑がゲリラに襲撃され、日本人社員が殺されたのです。炭坑警備に当たっていた独立守備隊の主力がゲリラ討伐に出動中で、手薄なところを狙われたのですが、留守を預かっていた井上清一中尉が異常な体験の持ち主でした。作家の沢地久枝さんが「昭和史の女」という本に書いていますが、井上が満州に出征する時、結婚したばかりの新妻が「後顧の憂いを断つため」と、遺書を残して自殺していたのです。その井上とすれば、「耐えられない不覚をとった」という思いだったのでしょうか。四キほど離れた平頂山部落を包囲すると、「ゲリラと内通した」という理由で、三千人の部落を抹殺してしまつたのです。住居を焼き払つて機関銃を掃射し、死体はダイナマイトで爆破した崖下に埋めましたが、逃げ延びたのはたった十人程度だつたと云います。支那事変で中国側が「日本軍の残虐行為」の典型として非難したものに、三つの光と書いた「三光作戦」と云われるものがあります。活発なゲリラ活動に手を焼いた日本軍が、部落ごと殺し尽くし、奪い尽くし、焼き尽くす。この抹殺作戦の原型となつたのが「平頂山事件」だつたと云われています。

満州国承認をめぐる暗黒史とも云うべきものですが、日本はなぜそんなに承認を急いだのでしょうか。リットン調査団の報告書が公表されたのは、承認半月後の十月二日です。調査団の列車は満鉄仕立ての特別列車でしたから、一説には関東軍は俊敏なスリを二十人も雇つて乗り込ませ、報告書の内容をかなり正確に知っていたんだ。こんな話さえあります。いずれにしても、日本にとつて不利な報告になるのは予想されていましたから、報告が公表されてからでは承認しにくくなる。また承認と云う強硬な態度を示せば、連盟が日本に有利な報告に変えるかも知れない。そんな甘い期待もあつたのでしょうか。日本が承認することで、満州国の独立国家としての既成事実を積み上げ、「満州問題は解決済みだ」と突き放そうとしたのです。

しかし日本はこの承認によつて、国家として引き返すことの出来ない、一線を越えてしまいました。承認前なら連盟がどんな報告を出しても、いくらでも外交交渉の余地があります。ところが日本が承認した満州国を、連盟から認めないと云われて、「はい、そうですか」と、国家の威信にかけても引き下がれない。そう

した立場に、日本は自ら追い込んでしまったのです。日本が連盟を脱退する運命は、この満州国承認によつて決まったと云つていいでしょう。斎藤首相に、承認が連盟脱退につながるという明確な認識、確固とした外交方針がないまま、陸軍と内田外相に引きずられてしまったことが、日本の不幸だったように思います。

×

×

国際連盟脱退と云うと、ニュース映画でよく見る有名な場面。黒縁の眼鏡に鼻髭を生やし、小柄だが、がっしりした感じの松岡洋右が、肩をそびやかすようにして、日本代表団を率いて退場する場面を思い出される方が多いと思います。昭和八年二月二十四日、ジュネーブの国際連盟臨時総会では、「満州国不承認」を内容とする対日勧告案の採決が行なわれていました。アルファベット順に票決をとつたのですが、「イエス」、「イエス」と続いて、松岡が初めて「ノー」と云つた時、予想されたこととはいえ、超満員の会場は一瞬ざわめきました。しかしシャム、現在のタイがわずかに棄権を表明しただけで、世界は四十二対一と圧倒的な多数で満州国を否定したのです。松岡は起立すると、短く英語で「総会の決議は遺憾で、日本は連盟と分かれるほかはない」と、反対演説をしました。そして最後を日本語で「さようなら」と結ぶと、そのまま席につかずに退場したのです。

松岡と共に代表を務めた佐藤尚武、敗戦の時のソ連大使で、「ポツダム宣言受諾すべし」の意見電報を打ち、戦後は参議院議長をした人ですが、「劇的シーンであつた」と回想しています。「いまでも目に浮かぶのは、白髪で、痩せた体のベルギーの議長イースマンが、議長席にしょんぼり座つて、我々の立ち去るのを見送つていた姿だ。満場寂として声なし」。こう云つていますが、日本が世界から孤立し、イースマンの姿が象徴するように、国際連盟の平和維持システムが破壊された瞬間でした。

日本国内は、この脱退をどう受け取つたのでしょうか。朝日新聞ジュネーブ特派員の至急報、「連盟よさらば！遂に協力の方途尽く 総会勧告書を採択し我が代表堂々退場す」。この見出しが、そのまま日本国内の気分を伝えていきます。堂々退場した松岡は、まさに国民的な英雄でした。松岡が帰国した時、横浜の埠頭は数万の群衆で埋まり、嵐のような万歳に包まれたのです。東京駅でも小学生が手に手に日の丸の旗を振つて出迎え、まるで凱旋將軍のような熱狂ぶりでした。新聞も「日本外交六十年の決算」をうたい、「我々は自主的外交を願うこと久しかった。いま初めて我は我なりという、独自の外交を打ち立てるに至つた」。こんな大げさな表現で、松岡を「自主外交の旗手」と讃えたのです。

ところがこの連盟脱退について、「松岡の本意ではなかつた。松岡は脱退に反対だったし、何とか脱退しないですむよう努力したが、心ならずも大見得を切つたのだ」。こう云う人が多いし、またそう書いている本も結構あるのですが、正直云つて私は疑問に思います。私が早稲田の学生の頃、時事新報のジュネーブ特

派員としてこの連盟脱退を取材した長谷川進一さんという方が、英語を教えにきていました。長谷川さんにも聞いてみたのですが、やはり「強い姿勢を示しつつ話を纏めるのが松岡の本心だった」と云います。松岡は代表として日本を出発する前夜、「満州国が承認された以上、日本の進むべき道は一本しかないじゃないか」。新聞記者にこう話していますし、ジュネーブに着くなりイギリスやフランスの外相にも、「満州国が承認されないなら、日本は連盟を脱退する」と、強硬論をぶつけています。長谷川さんは「ポーカで云うブラフ。松岡は交渉が難しいことを知っていたから、はったりをかけて少しでも有利にしようとしたのだ」と云うのです。

東大の人文地理の教授をされていた飯塚浩二さんが、こんな話をしています。パリに留学中だった飯塚さんは、海軍の随員に岡野中佐と云う親戚の人がいたので、ジュネーブに出かけて行って、松岡にも紹介して貰いました。夜、ホテルのバーで飲んでみると、代表団の面々がどうやって使命を果たすか、侃々諤々の議論だったそうです。すると松岡が、「陛下から、何とか喧嘩にならないように、妥協してこいと仰せつかっている。脱退すれば、腹を切ってお詫びしなければならぬ。貴様その覚悟をしてくれるか」。酒が入ったこととはいえ、真剣なやり取りにジーンとした思いでいると、その松岡が帰国して英雄扱ひされています。飯塚さんは「なるほど政治とは、そういうものかと思つた」と話していますが、同時に岡野中佐が、「大国の面子もいいが、いくら日本が強気だろうと、世界中を敵にまわして戦えるわけのものではなし。子供や孫たちに、お父さんたちはいったい何と云うことをしてくれたんだ、と云われて、顔向けできないような結果になることは目に見えている」。こう云つて懔然としていたのが、忘れられないと飯塚さんは云っています。

松岡のことを「パラドックス、逆説に陥りやすい人」と云つたのは、元老の西園寺です。右に行こうとすれば、まず左に向かい、大きな肯定を与えようとすれば、まず強く否定する。松岡の外相時代に秘書官をした加瀬俊一さんは、松岡から「外務省にデモが押し掛けてきたらどうするか」と聞かれたそうです。「大手を広げて立ちほだかつてはいけない。デモは狂暴になるばかりだ。いいか、デモの先頭に立って突つ走る。一緒に走る。そして次の角で、うまく曲がる」。これが松岡の答えでしたが、加瀬さんは「その松岡がうまく曲がりそこねたのが、日独伊三国同盟だった」と書いています。やがて近衛内閣外務大臣になった松岡は、昭和十五年に日独伊三国同盟を結び、この同盟の力で英米に対抗しようとして、結局は太平洋戦争への道を走ることになるのです。

「鋼鉄の決意」が松岡の口癖で、大変な自信家であり、雄弁家でした。機関銃のように、絶え間なく火を吐き続ける鋭い舌鋒。神がかつた気迫の激しさ。人を人とも思わないクソ度胸。長谷川さんの話だと、連盟の公用語は英語とフランス

語で、同時通訳のない時代ですから、松岡の英語演説はフランス語に訳されました。しかしそれが終わるのを待っていると、気が抜けてしまふ。そこで席には着かずに、フランス語の通訳が始まると、代表団を率いて一気に退場したのでそうです。こうした演出を考える、英雄的なゼスチュアも松岡の得意なものでした。

松岡はアメリカで苦学をして、外交官になった人です。松岡の家は、山口県光市の大きな廻船問屋でしたが、父親の代に倒産し、十三歳の松岡は従兄と一緒にアメリカ北西岸のポートランドに渡りました。皿洗いをしたり、行商をしたりしてオレゴン大学を卒業すると、明治三十七年、日露戦争が始まった年の外交官試験に首席で合格したのです。あの時代、アメリカで一旗挙げるといった負けん気の強さ、また人種差別の激しいアメリカで苦勞したことが、型破りな松岡の性格を育てたようです。そして外交官としての最初の赴任地が上海だったことが、松岡が大陸派外交官となる土台となり、当時三井物産の上海駐在員だった政友会の森格と結びつけることにもなりました。

余談ですが、明治三十八年の日本海海戦の時、バルチック艦隊がどの進路をとってやって来るのか、果たして対馬海峡へ来るのかどうかは、連合艦隊にとつては大問題でした。津軽海峡や宗谷海峡に回れば、大急ぎでそっちへ向かわなければなりません。この時、バルチック艦隊の石炭運搬船が上海に入港したのを掴んで、「バルチック艦隊、対馬海峡へ向かう公算大」と打電したのは、二十五歳の若き領事館補松岡洋右だったと云われます。松岡は苦勞して世の中を渡ってきた自信でしょう。変わり身の早い人でした。四十歳の時、「人間いつまで同じ所においてもウダツは上がらない」。こう云って外交官をやめ、満鉄に入って理事、副総裁になったのですか、これがますます満蒙重視の考え方を、松岡に強めさせたようです。昭和五年に政友会代議士になった松岡は、幣原外相の協調外交を「軟弱だ」と激しく批判しました。この時松岡が演説に使った「満蒙は日本の生命線」という言葉は、満州事変が始まると流行語になっていきました。大阪毎日と東京日日が「守れ満蒙、帝国の生命線」の見出しで、四多の大特集を組んだのです。いいことを書いてくれたとばかりに、飛び付いたのが陸軍です。大阪や京都の師団では「大阪毎日講読運動」まで始めたようですが、「その所論、憂国的だ」と云うのです。新聞も満州事変を境いにして、大きく軍部寄りに傾いていました。

その満蒙第一主義者の松岡に国際連盟の舞台が回ってきたのは、リットン調査団の報告書が連盟で審議されることになったからです。昭和七年十月二日に発表された報告書は、本文二百多、付属書七百多、十章からなる膨大なものです。満州事変での日本軍の行動は、正当な自衛手段とは認められないし、満州国も純粹で自発的な独立運動から生まれたものとは考えられない、と否定しています。ただこの報告書は、日本の歩み寄りを期待して、極めて冷静な立場から、現実的な解決を提案したものだっただけです。日本が指摘してきた満州の治安秩序の乱れ、

その無法律状態が紛争を誘発したことも認めていますし、日本の權益にも理解を示しています。そして解決策として、中国の主権の下に東三省といって奉天省、吉林省、黒竜江省の三省に自治政府を作る。満州を列国の共同管理下において、その指導のために大部分を日本人とする外国人顧問を入れるように提案しているのです。

リットンは、奉天滞在中に妹さん宛に「満州国は虚偽である。中国の混乱状態の大部分は日本自身が作った」。こんな内容の手紙を書いています。満州国を否定しただけでは、日本が受け入れないことも承知していました。蒋介石からは「中国の主権さえ認めてくれれば、かなりの部分で譲ってもよい」。こういう言質を取り付けていましたから、「現在の満州政府はそのまま残し、形式だけはあくまでも国民政府の任命にする。そういう形にしてもよいわけだ」。リットンはこの考えたのですが、この報告書を出す時「日本があらゆる妥協案を拒否すれば、非常に高価な犠牲を払わなければならないだろう」と云ったそうです。リットン報告をベースにした話し合いは、いくらでも可能でしたし、もしそうしていたら満州問題は別な形で進行していたでしょう。あるいは、戦争への道も避けられたかも知れません。それが出来なかったのは、日本が満州国を承認してしまった以上、国家の威信にかけても取り消すことが出来ない。日本はすでに、戻れない一線を越えてしまったからなのです。

リットン報告書に対する日本国内の反応は、各界各層にわたってほとんど拒絶反応と云つてもいいものでした。満州での軍事行動を否定された関東軍は、「連盟から脱退せよ」との幹部の連判状を政府に突き付けましたし、政友会総裁の鈴木喜三郎も「越権であり、認識不足だ」と云う談話を発表しました。この「認識不足」もまた、「君、それは認識不足だよ」と当時の流行語になったそうです。全国各地で「報告書排撃大会」を開いたのは、会員三百万人を擁する在郷軍人会です。日比谷公園の全国大会には六千人が集まりましたし、大阪や高知では、政党から商工会議所、教育団体や宗教団体まで参加して反対に氣勢を挙げたのです。大阪に続いて東京にも国防婦人会が生まれましたし、東京日日は「夢を説く報告書、誇大妄想も甚だし」と書きました。日本の国民は、満州事変を軍部の宣伝のままに「悲惨な満州の人を解放した正義の戦いだ」。こう信じ切っていましたし、連盟退論者の外務省情報部長の白鳥敏夫も、報告書の内容を意図的に操作、歪曲し、日本にとつていかにも不利益であるように宣伝して、国内世論を煽り立てたのです。ですから「列国の共同管理におく」なんて、とんでもないことで、報告書に冷静に耳を傾ける余裕はなく、満州国が認められない限り、全く妥協の余地がないように見えたのが、日本国内の実情でした。

そんな中で昭和天皇だけは、実は「報告書をそのまま鵜呑みにしてしまう積もりだった」と云うのです。「昭和天皇独白録」といって、天皇が戦後、側近に話さ

れたことを纏めたものに書いてあるのですが、天皇は内大臣の牧野伸顯と西園寺に相談されました。牧野は賛成しましたが、西園寺が「閣議がはねつけると決めた以上、これに反対するのは好ましくない」。こう云ったので、天皇は「自分の意思を徹することを思い止まったようなわけである」と云っておられます。結局は、田中首相辞職事件の反省が、政府の決定に対して天皇としての拒否権を発動しないことにされたわけです。

天皇は、憲法を遵守すると云う点でもそうですが、日常生活でも真面目すぎるほど厳格な方でした。これは木下道雄という侍従が書いていますのですが、満州事変が始まった昭和六年十一月、熊本で行なわれた陸軍特別大演習に出席して、鹿児島から戦艦榛名で帰京された時のことです。夜、誰もいないと思っていた後甲板の右舷手摺りに、ただ一人西を向いて立っている後ろ姿がありました。陛下でした。木下が何をご覧になつて思つて薩摩半島を見ると、海岸線一帯に延々と果てしなく続く赤いヒモのようなものが見えます。陛下の船が沖を通過する時間だということで、村人たちが手に手に松明を持ち、篝火をたいて陛下を見送りしていたのです。望遠鏡でそれに気がつかれた陛下は、お一人で沿岸の見送りの灯火に対してはるか挨拶をされていたと云うわけです。木下は「これこそ本当の日本の姿だ。いま陛下は艦上からご挨拶しておられますよ」。何とか村人たちに伝えたいと思ひ、艦長室に走つてわけを話すと、間もなく六個の探照灯が煌々と辺り一帯を照らし出しました。木下は「遙かに挙がる海岸の歓声を想像して、本当に嬉しかった」と回想していますが、この天皇の姿勢が敗戦後の多くの日本人に復興への勇気を与え、またマッカーサーを心服させたのだと思います。同時に、終始平和を望まれていた昭和天皇だっただけに、なぜ拒否権を行使されなかつたのか。憲法を守ることにいくら厳格だったにしても、私たちにもしどかしい思いが残るのも確かです。

リットン報告書を審議する国際連盟理事会は十一月二十一日からジュネーブで開かれることになり、斎藤内閣は首席代表として松岡を送りました。「アメリカ仕込みの流暢な英語力」。これが松岡起用の大きな理由だったと云われますが、松岡を強力に推薦したのが、連盟脱退論者の外務省の谷アジア局長、白鳥情報部長であり、政友会の森恪なのです。私はここに連盟脱退に向けて、意図的な人事があつたように思います。内田外相は「松岡は口も八丁、手も八丁。時代はまさに実力時代ではないか。こんな時には松岡は適任なのだ」と云っていますが、そうだったのでしようか。日頃から「自主外交」を訴えていた松岡は、出発の時から英雄でした。東京駅は身動きも出来ないほどの雑踏で、「松岡代表万歳」の声に包まれた松岡は、自信満々だったと云います。外務次官の有田八郎は、「絶対に連盟から脱退してはいけない」と考えていた一人で、松岡の手を固く握り、「自重してくれ。世論に惑わされて、取り返しをつかなくなるのを避けなければなら

らん」。こう云いましたが、果たして松岡の耳に届いたのかどうか。

確かに日本が「満州国承認」を捨てない限り、列国との衝突は避けられないので、すから、松岡の立場は苦しいものでした。しかしあいまいな形で話を纏め、とりあえずは連盟脱退を避けるチャンスは、数少なかつたとはいえあつたのです。もし松岡に「絶対に脱退してはならない」という固い信念があつたら、そのチャンスを抑んでいたでしょう。それが出来なかつたのは、状況的性格と云うのか、状況次第で態度を変える、松岡の性格が災いしたように思います。松岡は後になつてですが、「連盟脱退は神風に等しい」とさえ云っています。そして「満州事変前の日本は、芸者、富士山、茶の湯に代表される日本で、四流民族に低落するところだつた。それが満州事変を契機として、日本は外国追隨をやめ、日本精神に蘇つたのだ」と、満州事変を積極的に評価しているのです。これが、もともと松岡の信念でした。ただ松岡という人は、皇室崇拜の気持ちが異常なほど強かつたと云います。外相時代、日本の外交文書は「帝国」と書かなければならないのに、それを「皇国に書き直せ」と云つて、条約局長を困らせたそうです。しのつく雨に打たれながら、伊勢神宮の玉砂利に土下座して礼拝した話は有名です。ですから、天皇から「妥協してこい」と云われて、松岡もその努力はしたのだと思います。

文芸春秋の昭和八年九月号に、「松岡洋右縦横談」という松岡の書いた原稿が載っています。その中で松岡は「誰にも会わないでいたい。自分独りの時間を持ちたい。松岡は死んでしまつたのだと思つてくれたら、それでいいのである」と、しおらしい所を見せています。そして駅頭で受けた歓迎は「虚名」であつて、そんな資格は自分にはないとも云っています。しかし「満蒙が日本の生命線であるとの提唱は、世間の人々からはつきり認識されたようだ」と、自分の信念に対する満々たる自信は変えていないのです。「時がくれば、私も再び世間の人々の面前に出るであろう」と書いているように、松岡はやがて近衛内閣外相として華々しく返り咲き、日独伊三国同盟を結びます。松岡自ら「虚名」と云つた英雄扱いが、松岡の運命を大きく狂わせることになつたように思います。

松岡は外交官出身にしては珍しいほどお喋りであり、また自らの弁舌に酔つてしまふ人でした。連盟総会でメモ用紙一枚を持っただけ、四十六分間にわたる無原稿演説は、「十字架演説」として有名です。「ヨーロッパやアメリカは、日本を十字架にかけようとしている。しかし数年たたないうちに、世界の世論は変わるだろう。ナゼレのイエスがついに世界に理解されたように、日本もまた世界に理解されるだろう」。各国代表が「素晴らしかつた」と、次々と握手を求めてきたそうです。しかし外交交渉に大切なのは、こうした大向こうをうならせる、大上段に振りかぶつたやり方ではなく、事実を突き合わせて、妥協点を見付ける。一步後退、二歩前進の努力だつたのではないでしょうか。各国が「日本は頑なに妥協を拒否している」と思っている点では、少しも変わらなかつたのです。



齋藤首相は勿論、連盟脱退の非常手段は何とか避けたいと思つていました。ですから松岡に与えられた政府訓令も、反駁すべき点は反駁し、基本的態度としては、報告書の不備な点を指摘し、攻撃的であるよりは、むしろ説明的な態度をとる。満州国問題は、事態静観の方針で進もうと云うものでした。理事会では日中の主張が真つ向から対立し、報告書の審議は十二月六日からの臨時総会に移されました。そして日中両国を除いた十九か国委員会で、さらに検討して決議案を出すことになったのです。

松岡はマスコミ操作もうまい人でした。「満州のことが連盟にはよくわかつていない」と、現地の記者団に非難します。それが日本に打ち返され、国内感情を煽ることになったのです。全国の新聞、通信社百三十二社は十二月十九日、「ひとり日本だけではなく、真に世界の平和を願う文明諸国は満州国を承認し、その成長に協力する義務がある」という共同宣言を、四段抜きの記事で一斉に掲載しました。日本の言論機関の名前で「満州国の成立を危うくするような解決案は、断じて受諾すべきではない」と声明したのです。そこには強硬な世論を背景に、自分の国際的な立場を強化し、譲歩を引き出すと云った松岡一流の計算があつたのでしょうか。しかしそれがまた、連盟各国を硬化させる悪循環となり、裏目に出ています。松岡が「妥協したら国賊になり、脱退したら英雄になる」舞台は、松岡自身が作り出したとも云えるのです。そして、そうした状況的な性格の松岡に日本の運命を託したところに、日本の不幸があつたように思います。

イギリスをはじめフランス、ドイツといった常任理事国は、どちらかと云えば日本を弁護する姿勢を示しました。彼ら自身、中国の激しい排外運動には手を焼いていましたし、日本の脱退は連盟崩壊につながると、何とか脱退を防ごうとしたのです。これに対して対日強硬論をとつて結束したのが、スウェーデン、ノルウェー、チェコ・スロバキアといった小国でした。小国にとつて連盟こそは、民族自決主義の原則を保証し、大国と対等に発言出来る唯一の機関です。満州での日本の不法行為を黙認すれば、そのまま小国に対する脅威を、野放しににしてみようことになるからです。

そして、国際連盟の対日感情を決定的に悪くしたのが、今度もまた「熱河作戦」と呼ばれる、関東軍の軍事行動だったのです。熱河省というのは、万里長城から北の地域ですが、満州国は建国の際、東三省だけではなく「熱河省も領土に含む」と宣言していました。関東軍にとつて熱河省は、満州の安定支配には欠かせない地域でしたし、また特産品のアヘンは財政上からも大きな魅力だったので。熱河省への侵攻は、昭和八年元日の夜、長城の東端にある山海関の衝突事件から始まりました。支那駐屯軍の山海関守備隊の裏庭、鉄道線路に手榴弾四個が投げ込まれたのですが、関東軍は「中国軍の仕業だ」として山海関を占領したのです。実はこれも、山海関守備隊長落合甚九郎少佐の謀略でした。上海事変を起こして列

国の目を上海に集めている間に満州国を建国してしまつたように、関東軍が「連盟脱退に持つていくために、やったのだ」。こう云われても仕方がないでしょう。それを裏付けるように、陸軍省は一月二十二日、「国際連盟から脱退すること、行動の自由を確保すべきだ」という声明を発表しました。そして関東軍も二月二十三日、この日は国際連盟総会が開かれる前日ですが、「ゲリラ討伐」を名目に三方面から一斉に熱河省に侵攻したのです。

閣議で熱河作戦に反対したのは、大蔵大臣の高橋是清ただ一人でした。「日本は孤立のまま、成算のない戦争に引き込まれる。条約に従つてこそ、日本の立場も主張出来るのだ」と説きましたが、支持する閣僚はなく、齋藤首相も沈黙したままでした。高橋は内田外相に向かつて、「君はいつまで陸軍に縛られているのか。それじゃ困るじゃないか」となじりましたが、陸軍べつたりの内田には通じません。昭和天皇もこの熱河作戦が、連盟の審議に悪影響を与えるのではないかと、夜も眠れないほど心配されていました。憔悴が目立ち、侍従がのぞくと天皇が室内をグルグル回っています。「まるで猛獣が、檻の中を右往左往しているようだった」と話しています。

日本が連盟から脱退してからのことですが、関東軍は行動の自由を確保したといわんばかりに四月十日、万里長城を越えて中国本土の河北省に攻め入つたのです。天皇が参謀次長の真崎甚三郎を呼んで厳しく問い質したため、やっと関東軍司令官が撤退命令を出しました。その後も侵攻騒ぎがありました。五月末には唐沽で停戦協定が結ばれました。万里長城西側の河北省東部を非武装地帯とし、治安は中国の警察に当たらせるが、「中国軍はここに入るべからず」という地域を設定したのです。中国軍が撤退すれば日本軍も撤退するが、空中査察を行なつて監視するという内容で、関東軍にとっては、「満州事変の総仕上げ」とも云うべきものでした。これで日本の満州支配を安定させると共に、やがて中国本土に侵攻する足場を築くことが出来たのです。真崎参謀次長は、いわば「勅命」で抑えつけられたことが不満だったのでしよう。第二師団長をしていた東久邇宮稔彦王に、「陛下は、参謀本部の上奏をなかなかお聞きにならない。お力添えをお願いしたい」と要請をしたのだそうです。東久邇宮が「陸軍だけに偏つたことを期待するのは甚だけしからん」と拒絶すると、真崎は「この宮さんは、国家観念に乏しい」と触れ回つたと云います。軍人が「国家も外交も軍が動かして当然」と思う時代になつていました。

さて国際連盟に話を戻しますと、何とか日本を連盟に引き止めようと努力したのがイギリスです。フランスと共に「満州国否認」を省いた案文まで作つたのですが、中国の反対で流れました。次に「和協委員会」というものを作つて、アメリカ、ソ連を入れて、日中両国の調停を図る案を出したのですが、今度は日本が反対です。「連盟に入っていない米ソが加わるのはおかしい」というわけです。する

とイギリス外相は、駐日大使を通じて「議長宣言にするからどうか」と、日本の妥協を求めてきたのです。議長宣言なら、決議案と違つて拘束力を持ちません。日本が宣言に反対なら、その旨声明すればよく、連盟も面目を保てます。そうしておいて、和協委員会で中国と直接交渉すればいいではないかと云うのですが、連盟脱退論者の内田外相は拒否してしまいました。残る道は当然、強い拘束力を持つ勸告書ということになります。斎藤首相は内田外相に不満を表明したと云いますが、連盟脱退問題は外務大臣の所管事項です。内大臣の牧野も、これが脱退を食い止める最後のチャンスと思つたのでしよう。西園寺の秘書役の原田熊雄に、「イギリス案を受け入れるよう、西園寺から外相に奨めてもらつたらどうか」。こゝう提案したのですが、西園寺は「外務大臣に指図するわけにもいかない」と消極的でした。これで脱退回避の道が閉ざされることになつたのですから、私はやはり西園寺の氣力の衰えといったものを感じます。

イギリスが和協委員会による解決を断念したため、十九か国委員会が勸告案を作成して各国に通告したのが二月十六日です。内容は、リットン報告書を踏襲したもので、満州に対する主権は中国にあるとして、満鉄付属地以外の日本軍の撤収を指示していました。新聞各社は号外を出して「即時脱退」を訴えましたし、全国の在郷軍人会、右翼団体からも、斎藤首相や西園寺の所に「脱退せよ」の電報が殺到したのです。西園寺も「どうも様子を見るに、とうてい脱退は免れんな。結局脱退へ引き摺っていかれそうだ」と、あきらめたように呟いたと云います。ジュネーブの松岡代表からは、「事ここに至つた以上、脱退しなければ徒に笑ひ者になるだけだ」と、強い調子の意見電報が届きました。斎藤首相も、この電報で脱退の覚悟を決めたようです。西園寺の了解をとると、二十日に脱退を閣議決定し、松岡宛に「総会で採決を見る場合は、連盟脱退の方針を定め、連盟会議から退場を断行すべし」と、政府訓令を出したのです。

この訓令を受け取つた時、松岡は随員たちに「だから公家政治は嫌いなんだ」と、気炎を挙げたと云います。「西園寺はオレに向かつて、どんなことがあつても、政府に連盟から脱退するようなことはさせない、と約束した。それなのに、この最後の訓令は何だ」と云うのです。果たして西園寺がそんな約束をしたのかどうか。実際は、松岡が発前に西園寺に挨拶にきた時、西園寺は風邪で寝ていて面会出来ませんでした。そこで松岡は、秘書に「必ずまとめて帰るようにした」と云います」と言伝てして、帰つたのださうです。

それにしても、西園寺はなぜ連盟脱退を承知したのでしようか。斎藤首相は西園寺が了解した時、安堵の表情を浮かべたと云います。それが全てを物語っています。斎藤内閣が連盟に折れたら、陸軍が後へ引かないことは明らかです。各政党をはじめ世論の総攻撃を受けて、内閣は一日も保たなかつたでしよう。第二の五・一五事件が起こらないとも限りませんし、国内は騒然としたでしよう。もと

もと「無為にして化す」という消極的な課題が、齋藤内閣の使命でした。西園寺も齋藤も、連盟脱退のもたらす国際的な影響よりも、脱退しないことによつて激化する国内の抗争の方を恐れたのです。

日本の脱退がどんな重大な意味を持つていたのか、一番深刻に考えていたのは昭和天皇だったように思います。昭和八年の歌会始の御題は「朝海」、朝の海でしたが、天皇は「あめつちの神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」と歌われています。「波たたぬ世であれ」と祈られたのは、現実が波立ち、風吹き荒れて騒がしい世になりつつあるのを、よく承知されていたからです。天皇は当時三十一歳、日本という国をどうやって安全に御して行くか、ひたむきに考えておられたのです。ですから内田外相に「これまでのことは止むを得ないが、今後は一層外交を慎重にし、特に英米との親善協力に努力するよう」注意されました。そして内田が「詔書を出したい」と申し出ると、鈴木貫太郎侍従長を呼んで「詔書を出す場合には、首相、外相に次の点を付け加えるよう」強く指示されたのです。脱退止むなきになったのは誠に遺憾であること、脱退してもますます国際間の親交を厚くし、協調を保つこと、の二点です。詔書の「然りと雖も」以下の文言は、日本が連盟の中で孤立無援になつてもなお、連盟の枠内に留まる方がよいのではないか。天皇がそう思つていられたことを物語っています。

日本が天皇の指示通りの進路をとつていたら、その後の展開は変わつていたでしょう。ところが日本の脱退は、国際連盟の無力さを世界中に暴露してしましました。小国が対日経済制裁を要求しても、連盟は「満州国不承認」を決議しただけで、何ら実効ある措置が取れず、「連盟頼むに足らず」といった感じを与えてしまつたのです。そして日本国内では、この「国際的孤立」を「光榮ある孤立」と呼び、「断乎として所信を貫徹し、英米恐るるに足らず」といった声が幅をきかせるようになりました。陸軍は勿論脱退大歓迎です。陸軍部内に配つた文書で、「アジア・モンロー主義の宣言であり、欧米追随外交、萎縮退嬰外交の思想を精算、排撃して、自主独立外交への躍進である」と評価しています。アジア・モンロー主義というのは、モンロー大統領が唱えたアメリカの対外基本政策、アメリカ大陸へのヨーロッパ列強の干渉排除をもじつたものですが、そこには「アジアのことは全て日本がやる」という、勝ち誇つた陸軍の姿勢が滲み出ています。

確かに齋藤内閣の時代、五・一五事件直後のピリピリした社会の神経は、一応静かになりました。その頃の新聞を見ますと、昭和八年三月十五日に両国―市川間の総武線電化が完成して両国―千葉間の電車が十分間短縮されたとあります。子供の間でヨーヨーが大流行し、買ってやれない親の苦情で持参禁止にした学校があるとか、古川ロツパらが浅草で「笑いの王国」を旗揚げし、新宿のムーラン・ルージュも連日超満員だとか。まさか戦争の足音が間近に迫つていゝとは、とても思えないような「のんびりムード」です。高橋蔵相の積極財政で景気が上向いた

こともありました、何と云つても満州国承認と連盟脱退で、陸軍や国民世論を満足させたことが大きかったように思います。

しかし日本は、この一時的な小康の代わりに、「戦争」という大きな代償を払うことになりました。「光榮ある孤立」は「破滅ある孤立」へのステップだったので。日本の連盟脱退と歩調を合わせたように、ドイツには一月、ナチス・ヒットラー政権が誕生しました。「一党独裁体制」を樹立したヒットラーは十月十四日、日本に続いて連盟を脱退し、再軍備宣言をしたのです。日本が天皇が云われたように、英米協調を心がけていたらまだよかったです。ところが、「自主外交」を叫ぶ陸軍が主導権を握り、軍国化の道を辿っている日本です。全体主義国家のドイツが連盟の外に出れば、東と西の孤児同士、手を握り合う宿命にあったのです。しかもアメリカには、フランクリン・ルーズベルト大統領という強力な指導者が誕生していました。翌年の九年九月にはソ連が国際連盟に加入し、第二次世界大戦の二つの陣営が形成されていったのです。

東大の学長をされた林健太郎さんは、こう云っています。「満州事変が中国に対する侵略であることは間違いないが、それでも日本がここで矛を収め、満州国育成に力を注いでいたら、まだよかったです。つまり万里長城を越えて、中国本土に触手を伸ばすようなことをしなかつたら、支那事変は起こらなかつたらうし、アメリカも敢えて介入することはなかつたらう」。私もその通りだと思えます。実は瀨島龍三さん、戦争中大本営参謀をされ元伊藤忠の会長の瀨島さんも、全く同じようなことを云っているのです。「日本は既成事実の強化、つまり満州国の強化に努めると共に、政府間交渉と国際外交の展開に政治的英知を結集すべきだった。政府と陸軍中央部は、その英知と実行力に欠け、現地の情勢は悪化する一方で、支那事変に突入した。その最大の禍根は、現地軍の不用意な北支工作にあった」。瀨島さんの云う不用意な北支工作というのは、唐沽協定で築いた足場を基にして、中国北部にいろいろちよつかいを出したのです。

男爵、子爵といった爵位も、終身年金がつく金鷄勲章も、平和な時には軍人に縁のないものでした。戦争をやって初めて手にすることが出来るのです。手柄を立てたい。日清、日露戦争で勝ったことしか知らない軍人の功名心が、平地に乱を起こしたと云うのは、言い過ぎでしょうか。そして国家というものも人間と同じで、一つ欲をかくと、次から次と欲が膨らんでいきます。満州とれば、それを安定させるのに、まず熱河省がほしくなる。次は北支と云うわけです。満州事変で味をしめた陸軍は、すでにブレーキが利かなくなっていました。こうして見ると、全ての根源は張作霖爆殺事件でした。あの時、昭和天皇が望まれたように、関係者を軍法会議にかけて厳正に処罰していたら、満州事変は起こらなかつたでしょうし、軍事優先国家になることもなかつたように思います。そのツケは大変大きかったのです。